

開催地名：千葉県館山市	
開催日時	令和5年1月21日（土） 13：35 ～ 14：30
開催場所	館山市コミュニティセンター（オンラインによる講演）
語り部	大谷 慶一（福島県いわき市）
参加者	自主防災会、消防団、館山総合高校 93名
開催経緯	<p>当市は、南海トラフ地震防災対策推進地域に指定されており、県から示された最大規模の津波浸水想定を基に、津波ハザードマップを改訂し、その対策に臨んでいる。過去には元禄地震や大正地震による津波襲来の歴史もあるが、それを具体的に市民に伝承する機会が極めて少なく、伝承がなされていないのが現状である。そのため、住民の津波に対する防災意識の向上が課題である。</p>
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>私は福島県いわき市の薄磯地区に住む、東日本大震災の語り部だ。東日本大震災前の薄磯地区は、1キロ程度の海岸を有し、340世帯、780人が生活していたが、東日本大震災の津波により、一瞬にして地域は壊滅状態となり、住民116人が犠牲となった。また、福島県内では原発事故も発生し、強制避難を強いられた住民は10数万人にも及んだ。放射線の風評被害は今なお残る。本日は震災時の私の行動を基に、お話ししたいと思う。</p> <p>（２）東日本大震災発生</p> <p>2011年3月11日の14時46分に発生した地震はとてつもなく大きく、山が左右にゆっさゆっさ揺れているのが分かるほどだった。揺れが収まってテレビをつけたが映らなかったので、車のラジオで情報を集めた。ラジオによれば、近くの小名浜港には15時10分頃に3メートル以上の津波が到達するということがあったが、すでにその時刻となっているにもかかわらず、津波はまだ到達していなかった。津波は来ないと勝手に思い込み、200メートルほど離れた海岸まで行ってみると、海水が沖合の水平線まで引いており、海底が見える状態だった。それを見て大津波が来ることを確信し、自宅に引き返した。</p> <p>近所のお年寄り二人（うち一人は足が不自由）と自宅で待機していた妻に逃げるよう指示し、足の不自由な老婆を背負って一緒に裏山への石段を駆け上ったが、途中で津波が押し寄せた。この時、私は自分だけでも助かろうと行動した。背負っていた老婆を置き去りにし、もう一人の老婆の手を引き、飼い犬を抱いて登っていた妻に、老婆と犬を置いて急いで登るよう叫んだ。私と妻は助かったが、足の不自由な老婆は亡くなった、もう一人の老婆は津波に巻き込まれたが、奇跡的に助かった。</p> <p>私は、海を見に行き海底を見てから、津波が押し寄せるまでの13～14分間の記憶がほとんどない。津波が押し寄せてからの記憶も鮮明ではない。津波が家々を飲み込む音だったり、津波に飲み込まれる住民の悲鳴だったり、津波に伴う音の記憶も全くない。助かるために無我夢中で石段を登ったこと、津波が押し寄せた後は、巻き込まれた住民を救出するために夢中で水の中で行動したことをはっきり覚えていないのが実情だ。</p> <p>裏山に駆け上った私と妻を含む住民49人は、山の上にある神社で一夜を明かし、翌朝救助に来てくれた消防の方々に連れられて内陸の避難所に向かった。避難後も、一週間</p>

以上はのどの渇きや空腹をほとんど感じる事がなかった。今思えば、心の余裕が全くなかったのだと思う。

今では皆さんの前で普通にこの話ができるようになったが、震災後しばらくは、自分の行った行動が果たして正しいものだったのか、悩み苦しんだ。亡くなってしまった老婆の目を、私は今でも忘れられない。しかし、苦しくて悲しい自分の気持ちをさげすみ、一人で抱え込まないようにすることで、ようやく精神的に落ち着いた。今は、あの時の自分の判断は正しかったのだと思っている。

### (3) 震災を振り返って

住民のほとんどは、地震の後に津波が来ることはわかっていた。しかし、こんなにも大きな津波が来るとは誰も想像していなかった。防潮堤を超えるような津波は来ないと勝手に判断し、高を括っていたのだ。住民の心の隙間に、災害が入り込んでしまった格好だ。災害が大きければ大きいほど、我々は原因を人に押し付ける傾向があるが、想定外の災害が発生する可能性を常に頭に入れておく必要がある。そして、日常的に正常性バイアスを破る訓練をする必要がある。

災害が起きた時、逃げるタイミングはとても難しいが、自分で判断するしかない。逃げるスイッチは自分だけしか押せないのだ。自分の命より大切なものはないのだから、判断に躊躇は禁物だ。皆さんにお願いしたいことは、今日の私の話を、時々でいいから思い出していただきたいということだ。そして、今、自分の身の回りで命の危険が迫ったらどう行動するのかということを、時々でいいので考えほしい。想定外の災害は、ハザードマップのとおりにはいかない。死にたくないという本能の力を鍛えることで、自分の命を守れる人になっていただきたい。



開催地より

東日本大震災のご自身の体験をベースに、津波から自身の命を守ることにについてについてお話しいただいた。当市では本日のお話しを受けて、自主防災会との連携強化と防災訓練の実施を進めていく所存である。